

国際平和年を迎え

幼児教育を考える

莊司雅子

国連は本年（一九八六年）を国際平和年と制定した。平和に関しては個人の平和から民族や国家間の平和に至るまで、人間である以上誰しもこのうえなく求めてやまないものである。ところが人類最大の悲劇である原爆投下が広島に起ってからすでに四〇年の歳月が流れ、この間反戦・反核の運動が繰り上げられていながら核戦争こそ起っていないが、局地的な紛争や大小の戦争が地球のあちらこちらに起っている現状である。また米ソの軍拡競争が次第に拡大され両国とも軍備のために経済的に行きづまり、遂に昨年ジュネーブにおける米ソ首脳の軍縮会談が行われ、世界中の人びとに一応安堵の胸をなでさせた。これをきっかけに世界中の人びとがすべて立ち上って戦争をこの地球から追いつすよう努力することにこそ、国際平和年が制定された意味があると思う。

ところで戦争を撲滅するためには、地球上の人間が一人残らず戦争を起してはならない心をもち、平和を実現するように努めなければならない。そのためには地球上の人間がそ

のように教育されなければならない。

「戦争は人の心から始まる。それゆえ人間の心の中に平和の砦を築かなければならない」

これはユネスコ憲章の前文にうたっている一節である。この人の心の教育こそ幼児期から始めなければならない。幼児期にうえつけられた魂や心はその後一生つくものである。幼児期はすべての芽生えの始まる時期であることは、すでに学者の研究によって明らかにされている。特にこの時期は知識や技術の教育よりも心や情操や性格を育てるのに最も適している時期である。心や情操や性格は教えることによるよりも家庭・保育所・幼稚園における親・教師・保母など、幼児をとりかこむ人びとからの感化や影響によってつちかわれるものである。

平和の心はまず愛すること、信頼すること、感謝すること、他人に従順であり、他人を思いやることなどの芽生えを伸ばすことから育てられる。平和の心を育てる第一歩はまず赤ん坊に安定感をあたえることである。そのうちに歌や指遊びから遊戯や玩具を媒介として自然のうちに平和の心を育てる。保育所や幼稚園ではまず園内や園外における友だちとの遊びの中で保母や教師が意識的に友だちと仲よくする方法やけんかの時の解決法などを指導しながら感謝・信頼・従順・思いやりなどの心の芽生えを育てなければならない。ま

た年齢に応じて絵本や物語や紙芝居・劇遊びを通して戦争の悲惨さや平和の美しさを感じさせることもできる。更に外国の子どものことを知り、仲よくすることなどの国際的な意識もこの幼児期に育てたいものである。紛争や戦争をなくすには、まず個人々の愛と信頼と理解に始まり、民族や国家間の相互理解と相互援助とに依らなければならぬ。そのためにはまず家庭で園で学校でできるだけ機会あるごとに外国の子どもと仲よくすることを経験させ、外国の子どもの遊びや食物を見せ、聴かせ興味をもたせるのである。また、幼児に身近な食物が、多くの遠い国々の方々によって生産されて日本に送られていることも幼児の理解の範囲内で知らせることができる。逆に外国の友だちは日本がつくっているいろいろなおもちゃで喜んで遊んでいることも幼児に関心があるであろう。更に多くの外国の子どもが食物がなくて飢餓に苦しんでいること、戦争のために可愛い動物が死んだり、親や兄弟姉妹を失って路頭に迷っていることも幼児なりに知らせ、命の尊さ、平和のありがたさ、戦争の悲惨さを理解させたいものである。

国際平和年を迎え、まずわれわれの幼児に平和の心を育てることを考え実行したいものである。

(日本保育学会会長)